

ハンティング・パーティ

2008(平成20)年3月26日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★★



監督・脚本＝リチャード・シェパード／出演＝リチャード・ギア／テレンス・ハワード／ジェシー・アイゼンバーグ／ダイアン・クルーガー／リュボミール・ケレクス／ジェームズ・ブローリン／クリスティナ・クレペラ（エイベックス・エンタテインメント配給／2007年アメリカ映画／103分）

第2章

面白くて勉強になる

……戦場ジャーナリストは日本にもいるが、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争における「スレブレニツァの虐殺」現場取材したこの2人はすごい！ 500万ドルの懸賞金がついた戦争犯罪人への突撃取材はハチャメチャだが、さてその結末は……？ 西部開拓史を思わせる、彼らのフロンティアスピリットはお見事だが、展開は少しマンガ的……？

主人公は、戦場リポーターと戦場カメラマン

この映画の主人公は、戦場リポーターのサイモン・ハント（リチャード・ギア）と戦場カメラマンのダック（テレンス・ハワード）。命知らずの2人は最強のパートナーとして1992年4月から1995年11月まで続いたボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の戦火の現場に立っていた。しかし、サイモンの現地恋人（?）であったマルダ（クリスティナ・クレペラ）がセルビア人勢力によって無残に殺された直後の現場レポートでブチ切れてしまったサイモンは、上司のフランクリン（ジェームズ・ブローリン）をボロクソにののしったから、クビを宣告されることに。他方、戦場カメラマンのダックはその後順調に出世街道をひた走り、金と女は今やかなり自由……？

平和の式典にサイモンが……

ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の解決から5年後の2000年。ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボで行われる記念式典に出席したダックとフランクリンそしてハーバード大学を出たばかりの副局長の息子ベンジャミン（ジェシー・アイゼンバー

グ)の前に、突然サイモンが姿を現したからビックリ。まだ生きていたのか？ そう驚くと共に再会を喜ぶダックだったが、サイモンが単に昔を懐かしむためだけに登場したのではないことは明らか。さあ、サイモンがこれから狙おうとしているものは……？

「ぶっ飛ぶようなネタ」とは？

この映画を観ていると、かつての花形ジャーナリストでも、今や完全に落ちぶれ果てたサイモンの、半分やけクソ気味のチャレンジが目立つ。サイモンがダックにもかけた「ぶっ飛ぶようなネタ」とは、500万ドルの懸賞金がかげられた、ボスニア紛争におけるセルビア人指導者で戦争犯罪人のフォックス（リュボミール・ケレクス）に関するもの。つまり、ムスリム人やクロアチア人に対する虐殺及び民族浄化を指示した罪でオランダのハーグにある「旧ユーゴ国際刑事裁判所」に起訴されているものの、未だ捕まっていないフォックスの居場所を突きとめたので、そのインタビューをする(?)というものだ。ロクな報道の仕事もなく、今や多額の借金を抱えているサイモンは、そこにイチかバチかの勝負を挑んだわけだ。

ダックの選択は？

しかし、今や安定した地位に昇りつめたうえ、2日後にはギリシャの美女とのデートが待っているダックは、そんな危険な誘いに乗る必要はない。ところが、長年戦場カメラマンとして生死ギリギリの中で生きてきたダックは、その当時の血が騒ぐのを抑えられなかったようだ。面白いのは、そこに1人付録(?)が加わったこと。つまり、副局長の息子としてお飾りの仕事しかさせてもらえないことに反発しているベンジャミンが2人の話を盗み聞きしたうえで、強引に参加を申し込んできたわけだ。

後に聞くとところによると、フォックスの居場所についての信頼できる情報など何もなく、サイモンのカンだけだったというからある意味お笑いだが、アメリカ人の西部開拓史当時のフロンティアスピリットと命知らずの冒険心は、21世紀の今でも健在！

ツチ族の悲劇、カレン族の悲劇 vs. ムスリム人の悲劇

この映画は少しマンガ的なところもあるが、戦場ジャーナリストが命懸けで取材したボスニア・ヘルツェゴビナ紛争とムスリム人の悲劇は、去る3月14日にチベット自

治区ラサで発生した僧侶や市民による共産党・政府に対する暴動事件と同じように、私たちが関心を持たなければならない大事件。

他方、アフリカのツチ族の悲劇は、『ホテル・ルワンダ』(04年)と『ルワンダの涙』(06年)によって明らかになった。また、ミャンマーの軍事政権下におけるカレン族の悲劇は『ランボー 最後の戦場』(08年)によって明らかになった。そして、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の悲劇とムスリム人の悲劇は、この『ハンティング・パーティ』によって少しだけ明らかに。

「スレブレニツァの虐殺」とは、1995年7月、当時の推定人口4万人強のスレブレニツァに侵攻したセルビア人勢力により、数日間で約8000人のムスリム人が殺害されたという事件だが、そんな歴史上の事実を、私たちはこの映画からしっかり学ばなければ……。

マンガみたいな展開だが……？

3人がフォックスを求めて目指す先はサラエボの少し東南にあるセルビア人共和国内のチェレビチという村。サイモンが運転するベンツが盗んだ車だったとか、食事代をチョコまかしたため店主から銃で追われるなど、3人の取材旅行(?)は冒頭から波瀾含み。

また3人がCIAとまちがえられたり、それを前提として情報屋の女性マルヤナ(ダイアン・クルーガー)からある取引をもちかけられたりするシーンは、本人たちは必死なのだが、どこかマンガ的……？ マルヤナとの交渉で見事なCIAエージェントのお芝居を演じたベンジャミンの度胸には感心したが、私に言わせれば、所詮彼らの行動は無計画で行き当たりばったりとしか言いようがない。

したがって、やっとフォックスと会えたものの、その時は3人とも縛られて処刑寸前の状態。そしてフォックスの口から処刑命令が出され、サイモンの首が斧でぶっ飛ばされそうとした時一発の銃声が鳴ったが、何とこれぞホンモノのCIAだったからビックリ。既にフォックスの小屋はCIAが完全包囲……？ すると、これにてフォックスの逮捕劇が完了し、一件落着。私は一瞬そう思ったが……。

ひょっとして、インチキもあり……？

2003年に始まったイラク戦争においてアメリカの宿敵となったフセイン大統領は

逮捕され、06年12月30日に処刑された。ところで、イラン・イラク戦争（1980～1988年）は、イランで1979年に起きたホメイニ師の指導によるイスラム革命によって成立した「イスラム共和国」と、イラクで政権を握ったフセイン軍事政権との対立によって生まれたもの。そして当時、イスラム革命の広がりを恐れたアメリカ、ヨーロッパ、ソ連はこぞってフセインを支援したことはよく知られている。つまり、誰が敵で誰が味方かは、その時々国際情勢によって劇的に変わるわけだ。まさに、敵の敵は味方であり、白いネコも黒いネコもねずみをとるネコは良いネコということだ。

他方、01年の9・11事件の首謀者と目されるオサマ・ビン＝ラディンはまだ逮捕されていないし、この映画でフォックスのモデルとされた戦争犯罪人ラドヴァン・カラジッチもまだ逮捕されていない。もっとも、この映画のストーリーによれば、CIAはフォックスのいたあの小屋を包囲したのではなかったの……？ なのに、なぜCIAはフォックスを逃がしてしまったの……？

そんな疑問を抱くサイモンたちだが、さてその答えは……？ CIAの陰謀は複雑だから、ひょっとしてこんなインチキもあり……？

「神話」の展開はいかがなもの……？

この映画は本筋のストーリーが終了(?)した後、付録的な「神話」が登場するから、それにも注目！ フォックスへの突撃取材はサイモンの独創的なアイデアだったが、カネに困っているサイモンはどうも本気でフォックスを捕まえようと考えていたようだ。もしそうなら、そんなサイモンってひょっとして大バカ者……？ すると、そんなサイモンの計画に巻き込まれたダックとベンジャミンは大いなる被害者……？

私はすぐに、そんなさもない（現実的な？）判断をしてしまうのだが、「神話」に登場する物語はいかにも陽気なヤンキーそのものの発想。アメリカではやっぱりそういう展開が受けるのかもしれないが、日本的には、いかがなもの……？

日本にも立派な戦場ジャーナリストが

もっとも、命知らずの戦場ジャーナリストやカメラマンは、フロンティアスピリットを受け継いだサイモンやダックだけではなく、日本にもいる。それは、①2004年5月27日、イラク戦争取材中にバグダッド付近のマハムディヤで襲撃されて殺害された橋田信介氏や②2007年9月27日、ミャンマーのヤンゴンでの軍事政権に対する僧

侶、市民の反政府デモを取材中、兵士から至近距離で銃撃され死亡した長井健司氏たちだ。

しかし残念ながら、アホバカバラエティー番組が花盛りで、ぶら下がり取材と記者クラブ制に馴れ切ってしまった今の日本では、彼らの命懸けの取材に対する評価は必ずしも高くない。今や邦画は年間400本以上製作されているのだから、若者向けのケータイ小説を安易に映画化するのではなく、『ハンティング・パーティ』のように、彼らの命懸けのジャーナリスト魂を広く紹介しアピールするような映画を企画してもらいたいものだ。

2008(平成20)年3月27日記

第2章

面白くて勉強になる

ミニコラム

今年は BoA の『be with you.』で

08年7月30日のWBC世界フライ級タイトルマッチで、挑戦者清水智信を10回57秒ノックアウトで破り逆転勝利を収めたチャンピオン内藤大助を讃えるべくリングに上がってきたのは亀田興毅。このハプニングに観客は湧き、内藤も亀田の挑戦を受けそうだが、さて大晦日にあの因縁試合の再現はあるのだろうか？

『CLOSE YOUR EYES』は『男たちの大和／YAMATO』(05年)の主題歌として長渕剛が歌った曲だが、興毅の弟亀田大毅がリング上で歌ったためがぜん有名になった感がある。すると、『犬と私の10の約束』(08年)の主題歌を私があちこちで歌ったら……？

上映前に何度も流されていた歌声を

聴き「こりゃ名曲！」と思ったのが、BoA が作詞・作曲し自ら歌った『be with you.』。『犬と私の10の約束』の主題曲らしく、「約束」をテーマとした「いつか ねえ、交わした約束をちゃんと憶えていますか」と語りかけるサビの部分はメチャ難しいが、その美しいメロディラインは絶品！ 去年は竹内まりやの『人生の扉』で勝負だったが、今年はこの曲で勝負！ そう決心した私は、東京への新幹線の中で愛用の iPod を活用して猛練習。そのおかげで、今や BoA の『JEWEL SONG』と共に完全に私の持ち歌に。さあ、今年はあるゆる舞台でこの名曲を歌い込んでいかなければ……。

2008(平成20)年8月5日